

陸連時報 五三

2017
平成29年

5 月号

題字は平沼亮三(初代陸連会長)の書

目 次

2017年度主要競技会日程	182
理事会報告	183
強化関連情報	186
2017年シーズンの抱負(強化委員会)	
ダイヤモンドアスリートやり投フィンランド合宿報告(和歌山北高校 森下康士)	
2017JRDM(ジャパンレースディレクターズミーティング)報告	190
国際委員会	192
第208回国際陸上競技連盟(IAAF)カウンスル会議報告(会長 横川浩)	
国際陸上競技連盟(IAAF)技術委員会報告(陸連事務局事業部国際専任部長 関幸生(IAAF技術委員会委員))	
大会観戦ガイド	195
陸協NEWS	196
事務局からのお知らせ	198

公告

「陸連時報」は公益財団法人日本陸上競技連盟定款第4条第6号の「機関誌」の性格を有するものですが、毎月「陸上競技マガジン」と一体として発行しています。陸上競技に関する啓発記事のほか、必要に応じて、評議員会、理事会の決定事項、各専門委員会、事務局からの報告、通達も掲載いたします。本時報に掲載した通達は、公式に通達したものと取扱わせていただきますので、登録競技者は本時報の掲載内容にご注意下さい。また、陸上競技指導者の方は、所属競技者にお知らせ下さるようお願い致します。

公益財団法人日本陸上競技連盟

2017年度主要競技会日程

	主催・共催競技会			主要競技会			国際競技会				
	期日	競技会名	場所	期日	競技会名	場所	期日	競技会名	場所		
4月	16(日)	101 日本選手権50km競歩	石川	1(土)	★ 26 金葉記念選抜中・長距離	県民総合(熊本)	22(土)~23(日)	'17ワールドリレーズ	ナッソー(バハマ)		
	16(日)	19 長野マラソン	長野	22(土)~23(日)	★ 71 出雲陸上	浜山(島根)					
5月	21(日)	ゴールデングランプリ	等々力(神奈川)	22(土)~23(日)	★ GP1 TOKYO Combined Events	駒沢(東京)	20(土)~23(日)	24(月)	アジアグランプリ①	嘉興(中国)	
				23(日)	★ GP2 兵庫リレーカーニバル	ユニバー記念(兵庫)					
				23(日)	★ 7 ギブ清流ハーフマラソン	岐阜					
				29(土・祝)	★ GP3 織田記念陸上	広城公園(広島)					
				3(水・祝)	★ GP4 静岡国際陸上	エコパ(静岡)					
6月	10(土)~11(日)	63 全日本中学通信陸上	各地	4(日)	'17 布勢スプリント	コカ・コーラウエスト(鳥取)	調整中	4日中韓3カ国陸上	寧波(中国)		
				10(土)~11(日)	33 U20日本選手権混成	長野市営(長野)				★ 14 田島記念陸上	維新百年記念(山口)
				23(金)~25(日)	101 日本陸上競技選手権	ヤンマースタジアム長屋(大阪)				○ '17 日本学生個人	平塚(神奈川)
				9(金)~11(日)	9(日)	★ 32 サロマ湖100kmウルトラマラソン				北海道	
7月	29(土)~8/2(水)	70 全国高校陸上	天童(山形)	9(日)	★ 30 南部記念陸上	厚別(北海道)	6(木)~9(日)	22 アジア陸上競技選手権	プナ(ニューウェル(インド))		
				22(土)	★ 57 実業団・学生対抗	平塚(神奈川)					
8月	11(金)~13(日)	52 全国定通制高校陸上	駒沢(東京)	12(土)	★ 42 蔵王坊平クロスカントリー	上山(山形)	4(金)~13(日)	16 世界陸上競技選手権	ロンドン(イギリス)		
				19(土)	33 全国小学生陸上	日産スタジアム(神奈川)					
				19(土)~22(火)	44 全国中学陸上	熊本					
				26(土)~27(日)	52 全国高専陸上	松本(長野)					
9月	26(土)~27(日)	5 全国高校陸上選抜	ヤンマーフィールド長屋(大阪)	27(日)	★ '17 北海道マラソン	北海道	23(水)~28(月)	29 ユニバーシアード	台北(チャイニーズ・タイペイ)		
				8(金)~10(日)	○ 86 日本学生対校	福井(福井)					
10月	6(金)~10(火)	72 国民体育大会	松山(愛媛)	9(月・祝)	○ 29 出雲全日本大学選抜駅伝	島根	9(土)	デカネーション	アンジェ(フランス)		
				20(金)~22(日)	33 U20日本選手権	瑞穂(愛知)				★ 65 全日本実業団	ヤンマースタジアム長屋(大阪) / ヤンマーフィールド長屋(大阪)
				20(金)~22(日)	11 U18日本選手権	瑞穂(愛知)				○ 29 出雲全日本大学選抜駅伝	島根
				27(金)~29(日)	101 日本選手権リレー	日産スタジアム(神奈川)				★ 38 国際・全日本マスターズ	紀三井寺(和歌山)
				27(金)~29(日)	48 ジュニアオリンピック	日産スタジアム(神奈川)				○ 35 全日本大学女子駅伝	宮城
11月	12(日) 予定	3 さいたま国際マラソン	埼玉	5(日)	○ 49 全日本大学駅伝	愛知・三重	26(日)	アジアマラソン選手権	東莞(中国)		
				12(日)	★ 33 東日本女子駅伝	福島					
				19(日)	★ 7 神戸マラソン	兵庫					
				26(日)	★ 37 全日本実業団女子駅伝	宮城					
				26(日)	★ 7 大阪マラソン	大阪					
12月	3(日)	71 福岡国際マラソン	福岡	10(日)	★ '17 長崎陸協競歩	県立総合(長崎)	調整中	8 アジア室内選手権			
				10(日)	★ 29 全日本びわ湖クロスカントリー	希望が丘(滋賀)					
				17(日)	★ 48 防府読売マラソン	山口					
				24(日)	★ 36 山陽女子ロードレース	岡山					
2018 1月	14(日)	36 都道府県対抗女子駅伝	京都	1(月・祝)	66 元旦競歩	東京	調整中	14 アジアクロスカントリー			
				21(日)	23 都道府県対抗男子駅伝	広島					
				28(日)	37 大阪国際女子マラソン	大阪					
2月	3(土)~4(日)	'18 U20日本室内大阪	大阪城ホール(大阪)	4(日)	67 別大マラソン	大分	調整中	18 アジア陸上競技選手権・20km競歩	能美(石川)		
				4(日)	72 香川丸亀国際ハーフマラソン	香川					
				18(日)	101 日本選手権20km競歩	兵庫					
				11(日)	58 唐津10マイル	佐賀					
				24(土)	101 日本選手権クロスカントリー	海の中道海浜公園(福岡)					
				24(土)	33 U20日本選手権クロスカントリー	海の中道海浜公園(福岡)					
3月	4(日)	73 びわ湖毎日マラソン	滋賀	4(日)	○ 21 日本学生ハーフマラソン	東京	2(金)~4(日)	'18 世界室内選手権	バーミンガム(イギリス)		
				11(日)	'18 名古屋ウィメンズマラソン	愛知					
				18(日)	42 全日本競歩能美	石川					
3月	18(日)	18(日)	石川	18(日)	○ 12 日本学生20km競歩	石川	18(日)	'18 アジア陸上競技選手権・20km競歩	能美(石川)		
				18(日)	39 まつえレディースハーフマラソン	島根					
				18(日)	○ 21 日本学生女子ハーフマラソン	島根					

★=後援競技会、○=協力団体主要競技会

理事会報告

第40回理事会

日時：2017年3月17日（金）

13時55分～16時55分

場所：小田急第一生命ビル 11階 貸会議室

理事総数30名中出席者28名にて、理事会の成立を風間事務局長が報告。横川会長が挨拶を行い、引き続き、議事進行に入る。

【協議事項】

1. 第7期事業計画・収支予算

尾縣専務理事より事業計画が、小手川財務委員長より収支予算が、資料に基づき説明があり、原案通り承認された。

【第7期事業計画】

第6期事業計画からの変更点および第7期事業計画において特に強調したい点は下記の通り。

(1) 2020年東京オリンピックへの第一歩

新しい強化体制のもと、2020年東京オリンピックでの目標達成に向けて始動する。主に、強化組織の抜本的な変更、強化戦略情報の強化と拡充、医科学サポートの徹底的な活用、種目、競技トランスファー促進、指導者養成の強化に着手する。

(2) トップ競技者の強化・育成

2020年に想定される最高の結果を残すために、各種目の競技レベルに応じ、種目別に特化した強化施策を推進する。最重要国際競技会は、2020年東京オリンピックに向けて起点となるロンドン世界陸上競技選手権大会である。

(3) 指導者養成

指導者有資格者数5,000人計画に基づき、指導者養成を積極的に展開する。各年代に応じた適切な種目配置等を検討し、競技者育成方針を策定する。女性指導者を増やすための方策について検討を開始する。

(4) アンチ・ドーピング活動と医科学サポート

昨今の陸上界に於けるドーピング問題を受け、アンチ・ドーピング活動を更に強化する。トップアスリートのみならず、ジュニアアスリートに対しても、これまで以上に積極的な教育・啓発活動を広める。食育とスポーツ栄養情報の普及、東京オリンピックに向けたターゲット競技者の科学的な支援活動を図る。

(5) 国際的な活動

スポーツを通じた国際交流は日本の国策であり、国際社会との連携を深め、世界情勢を把握した上で、競技団体の中心的存在として、課題に取り組み、活動を推進する。

【第7期収支予算】

経常収益、経常費用ともに20億9,750万円となり、当期経常増減額は、前年同期±0円となる。

(1) 経常収益

①基本財産運用収益は600万円。基本財産12億円に対する利息収入。
②登録料受入収益は2,600万円。登録会員からの登録料収入は、一般と大学生が各100円、高校と中学生が各50円。第6期と同等の登録者数を見込み、同額とした。

③加盟金受入収益は470万円。1加盟団体から10万円の加盟金を納めて頂いている。

④受取寄付金はなし。

⑤受取委託金・助成金は、4億390万円。日本体育協会、日本オリンピック委員会、日本スポーツ振興センターからの委託金・補助金・助成金収入。

⑥事業収益は16億30万円。オフィシャルスポンサー料と競技会での協賛金、参加料、入場料収益、放送権料などが主な収入。

⑦その他事業収益は5,620万円。器具検定料、競技場公認料、ナンバーカード広告料、後援名義使用料等の収入。

(2) 経常費用

①事業費は19億8,181万円。競技会予算、委員会予算、広報予算、加盟団体等への地域活性化助成金、アスレティック・アワード等のイベントに関する費用。

②管理費の事務局運営費等は1億1,569万円。

(3) 各委員会予算

総務委員会178万円、強化委員会5億3,920万円、法制委員会24万円、財務委員会220万円、競技運営委員会2,014万円、普及育成委員会7,337万円、国際委員会15万円、施設用器具委員会1,327万円、科学委員会1,900万円、医事委員会2,115万円

2. 2017年度主要競技会日程

尾縣専務理事より説明があり、原案通り承認された。

詳細は、本時報182頁参照。

3. 2016年度栄章

尾縣専務理事より資料に基づき説明があり、原案通り承認された。

功労章3名、秩父官章35名、高校優秀指導者章47名、中学優秀指導者章47名、高校優秀選手章47名、中学優秀選手章47名、日本記録章3名と延2チーム、室内日本記録章延3名、U20日本記録章延11名。

4. 評議員会の開催

尾縣専務理事より、評議員会の開催について資料に基づき説明があり、定時評議員会として2017年6月9日（金）14時30分からの開催が承認された。

5. 第16回世界陸上競技選手権大会（2017／ロンドン）

トラック&フィールド種目日本代表選手選考要項

伊東強化委員長より資料に基づき説明があり、原案通り承認された。

6. 第101回日本陸上競技選手権大会参加資格の改定

伊東強化委員長より資料に基づき説明があり、改定として、男子5000mの第101回日本陸上競技選手権大会参加標準記録Aに3000mの記録7分55秒00を追加することが承認された。

7. 強化競技者規程の改定

伊東強化委員長より資料に基づき説明があり、強化競技者規程を改定する旨が原案通り承認された。

【主な改定箇所】

(格付けの基準)

第2条 強化競技者の格付けは2ランクとする。

(1) ゴールドアスリート

①強化競技者指定対象国際競技会で8位以内に入賞、またはリレー種目でメダルを獲得した競技者。

②強化競技者標準記録対象競技会においてゴールドアスリート指定標準記録を満たした競技者。

(2) シルバーアスリート

①強化競技者指定対象国際競技会のリレー種目で8位入賞した競技者。

②強化競技者標準記録対象競技会においてシルバーアスリート指定標準記録を満たした競技者。

2強化競技者指定対象国際競技会、強化競技者標準記録対象競技会及び指定標準記録は、年度毎に本連盟が別に定めるものとし、本連盟は、これを年度途中においても、見直すことができるものとする。

(処遇)

第6条 強化費は、ゴールドが年間400万円、シルバーが年間150万円を上限とし、資格付与の時期により金額は異なる。

8. 陸上競技場以外での公認競技会開催に対応する規程、細則の改定および制定

平塚施設用器具委員長より資料に基づき説明があり、「陸上競技場だけでなく、街角の広場、他のスポーツ施設等に設置された施設で公認競技会が開催され、より多くの人々が身近な場所で陸上競技を観覧、体験する機会を提供することで陸上競技の普及と発展のために競技規則第149条2（記録の有効性）が変更された。この変更に伴い競技施設を認定するための諸規則（規程、細則）を整備するものである。」という趣旨に基づいた陸上競技場以外での公認競技会開催に対応する規程、細則の改定および制定が原案通り、承認された。

【報告事項】

1. 2017年度強化競技者

伊東強化委員長より資料に基づき、2017年3月17日付けのゴールドアスリート9名、シルバーアスリート2名が報告された。

ゴールドアスリート（9名）：山縣亮太（セイコー）、飯塚翔太（ミズノ）、桐生祥秀（東洋大学）、ケンブリッジ飛鳥、荒井広宙（自衛隊体育学校）、澤野大地（富士通）、松永大介（東洋大学）、高橋英輝（富士通）、藤澤勇（ALSOK）

シルバーアスリート（2名）：山西利和（京都大学）、安藤友香（スズキ浜松AC）

2. 2017ワールドリレーズ（ナッソー）日本代表選手選考要項

伊東強化委員長より資料に基づき、2017ワールドリレーズ（ナッソー）日本代表選手選考要項が報告された。

3. 第2回アジアユース陸上競技選手権大会（2017／バンコク）日本代表選手選考要項

伊東強化委員長より資料に基づき、第2回アジアユース陸上競技選手権大会（2017／バンコク）日本代表選手選考要項が報告された。

4. 第22回アジア陸上競技選手権大会（2017／ランチャー）日本代表選手選考要項

伊東強化委員長より資料に基づき、第22回アジア陸上競技選手権大会（2017／ランチャー）日本代表選手選考要項が報告された。

5. 第10回U18世界陸上競技選手権大会（2017／ナイロビ）日本代表選手選考要項

伊東強化委員長より資料に基づき、第10回U18世界陸上競技選手権

大会（2017 / ナイロビ）日本代表選手選考要項が報告された。

上記2～5の日本代表選手選考要項は、本連盟WEBサイトhttp://www.jaaf.or.jp/athlete/2017daihyo/参照。

6. ニトリアスレックス2017報告

伊東強化委員長より資料に基づき、2017年2月4日、9日、11日、オーストラリア・メルボルンにおいて開催されたニトリアスレックス2017の報告がされた。

7. 第42回世界クロスカントリー選手権大会（2017 / カンバラ）日本代表選手団

伊東強化委員長より資料に基づき、選手20名（男子10名、女子10名）、役員10名の日本代表選手団が報告された。

8. 2017年度S級公認審判員昇格者

鈴木競技運営委員長より資料に基づき報告された。

都道府県陸上競技協会からの推薦者259名に対してS級昇格者は256名であった。

9. 2017年度競技規則の改正

鈴木競技運営委員長より資料に基づき報告された。

10. 2016年度加盟団体連絡協議会報告

尾縣専務理事より資料に基づき説明があった。2016年度に各地域陸上競技協会にうかがい開催した協議会の内容を、組織、登録、財政、会計、競技会、強化、普及育成、競技運営、施設器具に区分し、その要望、それから考えられる回答を報告書とした。

なお、非公開において、「第16回世界陸上競技選手権大会（2017 / ロンドン）マラソン日本代表選手選考」を協議し、原案の通り承認された。

第16回世界陸上競技選手権大会（2017 / ロンドン）トラック&フィールド種目 日本代表選手選考要項

- 1. 編成方針
第32回オリンピック競技大会（2020 / 東京）で活躍が期待される競技者を派遣する。
2. 開催地
ロンドン（イギリス）
3. 開催期間
2017年8月4日（金）～13日（日）
4. 開催種目
(1) 男子
100m、200m、400m、800m、1500m、5000m、10000m、マラソン、3000mSC、110mH、400mH、走高跳、棒高跳、走幅跳、三段跳、砲丸投、円盤投、ハンマー投、やり投、十種競技、20km競歩、50km競歩、4×100mリレー、4×400mリレー
(2) 女子
100m、200m、400m、800m、1500m、5000m、10000m、マラソン、3000mSC、100mH、400mH、走高跳、棒高跳、走幅跳、三段跳、砲丸投、円盤投、ハンマー投、やり投、七種競技、20km競歩、4×100mリレー、4×400mリレー
5. 主なスケジュール
2017年3月17日（金） 日本代表選考要項理事会承認
6月10日（土）～11日（日） 第101回日本陸上競技選手権大会・混成競技
6月23日（金）～25日（日） 第101回日本陸上競技選手権大会
6月26日（月） 第1次日本代表選手発表
7月1日（月） 日本代表選手団ミーティング・結団式
7月24日（月） 第2次日本代表選手発表
※以降IAAF Invitationによる追加の可能性あり。
8月4日（金）～13日（日） 第16回世界陸上競技選手権大会

- 1) IAAF DIAMOND LEAGUE 2017
2) IAAF WORLD CHALLENGE 2017（セイコーゴールデングランプリ陸上2017川崎含む）
3) 2017日本グランプリシリーズ
4) 国内指定競技会（派遣設定記録対象競技会）
5) 第22回アジア陸上競技選手権大会（2017 / ランナー）
(2) 第1次代表選手発表時の選考（2017年6月26日予定）
1) 内定
日本選手権時内定条件を満たした競技者は、日本選手権終了時点で、選考基準の優先順位上位の項による内定条件を満たした競技者が3名に満たなかった場合、即時内定とする。
ただし、該当者が選考基準優先順位上位の項による内定者を含めると4名以上となる場合は、日本選手権終了後、優先順位同格の内定条件を満たした競技者のみを対象に編成方針及び選考基準に則り、強化委員会にて選考原案を作成し、選考委員会にて選考し、理事会において決定する。
2) 選考条件による選考（リレー種目は除く）
日本選手権終了時点で、内定条件を満たした競技者が3名に満たなかった場合、日本選手権終了後、編成方針及び選考基準に則り、強化委員会にて選考原案を作成し、選考委員会にて選考し、理事会（2017年6月26日予定）において決定する。
3) リレー種目の選考
日本選手権終了後、編成方針及び選考基準に則り、強化委員会にて選考原案を作成し、選考委員会にて選考し、理事会において代表候補選手として決定し、2017年7月24日以降に出場権を得た場合に代表候補選手を正式に代表選手として決定する。
(3) 第2次代表選手発表時の追加（2017年7月24日）
日本選手権終了時点で、選考基準の優先順位上位の項で3名を満たさなかった場合、追加条件を満たす競技者を、編成方針及び選考基準に則り、代表選手として追加することができる。
ただし、2017年6月26日以降の参加標準記録の突破は、指定競技会のみを対象とする。指定競技会は、強化委員会が別途定める。
(4) IAAF invitationによる追加条件（2017年7月24日以降）
選考基準の優先順位上位の項で3名を満たさなかった場合、IAAFからInvitationを受け次第、追加条件を満たす競技者を、編成方針及び選考基準に則り、代表選手として追加することができる。

- 6. 選考競技会
(1) 第101回日本陸上競技選手権大会
(2) 第101回日本陸上競技選手権大会・混成競技
(3) 2017日本グランプリシリーズ
1) TOKYO Combined Events Meet 2017
2) 第65回兵庫リレーカーニバル
3) 第51回織田幹雄記念国際陸上競技大会
4) 第33回静岡陸上競技大会
(4) セイコーゴールデングランプリ2017川崎
(5) アジアグランプリ2017
1) 第1戦 嘉興大会（中国）
2) 第2戦 金華大会（中国）
3) 第3戦 台北大会（チャイニーズタイペイ）
7. 派遣設定記録対象競技会
下記の大会で出した記録を派遣設定記録として認める。
(1) IAAF DIAMOND LEAGUE 2017
(2) IAAF WORLD CHALLENGE 2017（セイコーゴールデングランプリ陸上2017川崎含む）
(3) 第101回日本陸上競技選手権大会
(4) 第101回日本陸上競技選手権大会・混成競技
(5) 2017日本グランプリシリーズ
(6) 国内指定競技会
1) 第26回金栗記念選抜陸上長距離熊本市大会
2) 吉岡隆徳記念第71回出雲陸上競技大会
3) 2017水戸招待陸上
4) 第28回ゴールデンゲームズinのべおか
5) 第4回木南選手記念陸上競技大会
6) 布勢スプリント2017
7) 第14回 田島直人記念陸上競技大会
(7) 第22回アジア陸上競技選手権大会（2017 / ランナー）
(8) アジアグランプリ2017
(9) PAYTON JORDAN INVITATIONAL（Stanford, CA）
※男女5000m / 男女10000m / 男女3000mSCのみ有効
(10) IAAF CHALLENGES ※男子十種競技のみ有効
8. カテゴリー・種目別選考基準
下記カテゴリー別の、「内定条件」、「選考条件」、「追加条件」は別紙カテゴリー・種目別選考基準の通り定める。
ただし、男子400m及び、男子4×400mリレーについては、2017年4月23日に行われる2017ワールドシリーズで、8位入賞し出場権を獲得できるかどうかにより選考基準が流動的になるため、2017年5月22日に行われる理事会において定める。

- 10. 補足
(1) 資格記録の有効期間は下記の通り。
1) 派遣設定記録 2017年1月1日～2017年6月25日
2) 参加標準記録 10000m、混成競技：2016年1月1日～2017年7月23日
その他の種目：2016年10月1日～2017年7月23日
(2) 代表選手は、編成方針及び選考基準に則って選考されるが、その派遣人数は国際陸上競技連盟が定めるエントリー数の上限の枠を保障するものではない。
(3) 第22回アジア陸上競技選手権大会（2017 / ランナー）の優勝者は、IAAFのエントリールールに基づき、参加標準記録突破と同等の資格を有する。
(4) 天災、その他の理由で選考競技会が中止になった場合は、代替の選考競技会を設定する場合がある。
(5) 本大会までに故障等により、競技力を発揮できない事態が生じた場合は代表を取消することができる。
(6) アンチ・ドーピングに関わる全ての基準を順守出来ない場合、日本代表の資格を取り消す場合がある。

第16回世界陸上競技選手権大会（2017 / ロンドン）トラック&フィールド種目参加標準記録・派遣設定記録

Table with 3 main sections: 1. トラック種目 (男子/女子 1500m以内), 2. フィールド種目・混成競技 (男子/女子), 3. リレー種目 (男子/女子). Each section contains a table of records for various events like 100m, 200m, 400m, etc.

第101回日本陸上競技選手権大会 参加資格

1. 参加資格

2017年度本連盟登録者で、下記の(1)から(4)のいずれかに該当し日本国籍を有する競技者(日本で生まれ育った外国籍競技者を含む)。

但し、男女の5000m、10000mでは日本選手権参加標準記録Aを満たし、参加申込のあった外国籍競技者のうち、出場資格記録の上位6名までをオープン参加として出場を認める。

(1) 第100回日本陸上競技選手権大会の優勝者(但し、その種目に限る)。

(2) 参加標準記録Aを突破した競技者。

(3) 第100回日本陸上競技選手権大会クロスカントリー競走で下記の成績を収めた競技者。

- 1) 男子10000m
 - ① シニア男子12kmの優勝者。
 - ② シニア男子12kmの第2位、第3位の競技者で、男子10000mの参加標準記録Bを満たした競技者。
- 2) 女子5000m/女子10000m
 - ① シニア女子8kmの優勝者。(ただし、女子5000m又は女子10000mのどちらか1種目に限る)
 - ② シニア女子8kmの第2位、第3位の競技者で、女子5000m又は女子10000mの参加標準記録Bを満たした競技者。(ただし、参加標準記録を満たした種目に限る)

(4) 2017年度の地域選手権が、2017年5月28日までに開催された場合は、各種目3位以内に入賞した競技者で、参加標準記録Bを満たした競技者。

- ・開催されていない場合は、2016年度の地域選手権各種目3位以内に入賞した競技者で、参加標準記録Bを満たした競技者。
- ・本連盟強化委員会が特に推薦する本連盟登録競技者。
- ・開催陸上競技協会が推薦し、本連盟強化委員会が承認する競技者。

2. 参加標準記録

右記参照

3. 参加標準記録有効期間

記録の有効期間は2016年1月1日～2017年5月28日まで。

4. その他

(1) 室内競技会の記録も有効とする。

- (2) 800m(含ハードル)までの記録は電気時計(写真判定装置)で計測したのみ有効とする。
- (3) エントリー数の関係で競技運営上困難が生じた場合は、上記の参加資格を有する競技者であっても参加を制限されることがある。その場合、参加資格の優先順位に準じて出場者を決定する。

第101回日本陸上競技選手権大会 参加標準記録

男子		種目	女子	
A	B		A	B
10'40	10'50	100m	11'80	11'90
20'80	20'95	200m	24'25	24'40
46'60	46'85	400m	54'80	55'15
1'50'00	1'51'00	800m	2'09'00	2'10'00
3'47'00	3'49'00	1500m	4'22'00	4'24'00
13'41'00	13'52'00	5000m	15'40'00	15'50'00
(3000m/7'55'00)				
28'20'00	28'45'00	10000m	32'30'00	33'00'00
13'95	14'10	110mH / 100mH	13'80	14'00
50'42	50'82	400mH	59'00	59'60
8'50'00	8'55'00	3000mSC	10'25'00	10'35'00
2m17	2m13	走高跳	1m76	1m73
5m30	5m25	棒高跳	3m80	3m70
7m75	7m65	走幅跳	6m05	5m95
16m00	15m80	三段跳	12m60	12m40
16m40	16m10	砲丸投	14m20	14m00
51m50	50m50	円盤投	47m00	46m00
64m00	62m50	ハンマー投	56m00	54m50
74m00	73m00	やり投	53m50	52m50

強化競技者規程

(目的)

第1条 公益財団法人日本陸上競技連盟(以下、本連盟という)は、第32回オリンピック競技大会(2020/東京)において、メダル獲得及び8位入賞が期待されると本連盟が認定した競技者の、本連盟の強化方針に沿った個人強化活動の充実を図るために本規程を定める。

(格付けの基準)

第2条 強化競技者の格付けは2ランクとする。

(1) ゴールドアスリート

①強化競技者指定対象国際競技会で8位以内に入賞、またはリレー種目でメダルを獲得した競技者。

②強化競技者標準記録対象競技会においてゴールドアスリート指定標準記録を満たした競技者。

(2) シルバーアスリート

①強化競技者指定対象国際競技会のリレー種目で8位入賞した競技者。

②強化競技者標準記録対象競技会においてシルバーアスリート指定標準記録を満たした競技者。

2 強化競技者指定対象国際競技会、強化競技者標準記録対象競技会及び指定標準記録は、年度毎に本連盟が別に定めるものとし、本連盟は、これを年度途中においても、見直すことができるものとする。

(資格の付与)

第3条 本連盟強化委員会は、競技者が第2条のいずれかに該当し、かつ、当該競技者が第7条に定める強化競技者の義務を遵守することを承諾し、かつ本連盟との間で強化競技者契約を締結することを条件として、当該選手に対し、強化競技者として資格を付与する。

(指定の期間)

第4条 1 ゴールドアスリートの指定期間は、資格を付与された日(以下「資格付与日」という)の翌日から資格付与日が属する事業年度の翌事業年度の末日までとする。

2 シルバーアスリートの指定期間は、資格付与日の翌日から資格付与日が属する事業年度の末日までとする。

3 前各項にかかわらず、資格付与の要件若しくは処遇について本規程が改定され、又は、第2条第2項に基づいて本連盟が指定する競技会若しくは標準記録の年度毎の指定若しくは年度途中における見直しが行われた場合において、改定後の規程又は標準記録若しくは標準記録の新年度における指定若しくは年度途中の見直しの趣旨に照らし、本連盟強化委員会が必要と認めるときは、本連盟強化委員会は、指定された期間の中途であっても、指定を解除し、または処遇の変更をすることができる。

(指定の解除)

第5条 本連盟強化委員会は、強化競技者が、次のいずれかに該当するときは、年度途中であっても、指定を解除し、または強化費の使用を停止することができる。

- (1) 引退した競技者
- (2) 長期間競技会に出場していない競技者
- (3) 居場所情報の提出義務違反や検査未了等、アンチ・ドーピングの理念に反する行動をとった競技者
- (4) 第7条に違反した競技者
- (5) 強化競技者契約に違反した競技者
- (6) その他、本連盟強化委員会が強化競技者として不適切であると判断した競技者

(処遇)

第6条 強化費は、ゴールドが年間400万円、シルバーが年間150万円を上限とし、資格付与の時期により金額は異なる。

なお、強化競技者の処遇の詳細は、本連盟が別に定める。

(強化競技者の義務)

第7条 強化競技者の指定を受けようとする競技者は、次に定める義務を遵守することを承諾すると共に、本連盟との間で、別途、強化競技者契約を締結しなければならない。

- (1) 本制度の目的に即して、競技力の向上に努める。
- (2) 正当な理由がある場合を除き、本連盟強化委員会が指定する国際大会に出場する。
- (3) 正当な理由がある場合を除き、本連盟強化委員会が指定する行事に参加する。
- (4) 原則として年1回、本連盟強化委員会が指定する測定及びメディカルチェックを受診する。
- (5) アンチ・ドーピングに関わる全ての基準を適正に遵守する。
- (6) 本連盟強化委員会に対し、定められた時期に強化計画の提出と活動実績の報告をする。
- (7) 本連盟強化委員会が必要とした面談に応じる。
- (8) 日本を代表するトップアスリートとして自覚を持ち、メディアからのインタビュー、取材及び撮影などを受けるときは、身だしなみや服装に注意し誠実に対応する。
- (9) メディアへの対応、肖像権等に関する義務は、本連盟が別に定める。

2017年度強化競技者指定に関する対象競技会

1. 強化競技者指定対象国際競技会
 - (1) 第31回オリンピック競技大会(2016/リオデジャネイロ)
 - (2) 第16回世界陸上競技選手権大会(2017/ロンドン)

2. 強化競技者標準記録指定競技会

2017年度の指定は、2017年1月1日～2018年3月31日までの下記競技会を対象とする。

(1) 国際競技会

- 1) 第16回世界陸上競技選手権大会(2017/ロンドン)
- 2) 第22回アジア陸上競技選手権大会(2017/ラナー)
- 3) 第29回ユニバーシアード競技大会(2017/台北)
- 4) IAAF DIAMOND LEAGUE 2017
- 5) IAAF WORLD CHALLENGE 2017
(セイコーゴールデングランプリ陸上2017川崎含む)
- 6) IAAF CHALLENGES 2017(混成競技、競歩、ハンマー投)
- 7) World Marathon Majors
- 8) 2017アジアグランプリ 嘉興(中国)、金華(中国)、台北(タイワン)
- 9) 第16回世界陸上競技選手権大会(2017/ロンドン)及び第18回アジア競技大会(2018/ジャカルタ)日本代表選考要項で指定された選考競技会
- 10) ヨーロッパ陸連公認Premium Meetings / Classic Meetings / Area Permit Meetings

(2) 国内競技会

- (1) 第101回日本陸上競技選手権大会
- (2) 2017日本グランプリシリーズ
- (3) 国内指定競技会
 - ① 第26回金栗記念選抜陸上長距離推本大会
 - ② 吉岡隆徳記念第71回出雲陸上競技大会
 - ③ 2017本戸招待陸上
 - ④ 第28回日本ゴールデングラズゲームズinのべおか
 - ⑤ 第4回本南道孝記念陸上競技大会
 - ⑥ 布勢スプリント2017
 - ⑦ 第14回 田島直人記念陸上競技大会
 - ⑧ 第30回南部忠平記念陸上競技大会
 - ⑨ ホクレンディスタンスチャレンジ2017

2017年度 強化競技者標準記録

男子		種目	女子	
ゴールド	シルバー		ゴールド	シルバー
9.85	9.92	100m	10.82	10.90
19.86	20.01	200m	22.13	22.34
44.19	44.51	400m	49.78	50.10
1.43.02	1.43.57	800m	1.57.40	1.57.84
3.30.18	3.31.42	1500m	3.57.74	4.00.01
12.55.88	13.02.09	5000m	14.34.63	14.53.91
27.03.20	27.14.66	10000m	30.30.17	30.59.17
8.05.54	8.14.28	3000mSC	9.12.24	9.20.16
13.06	13.14	110mH/100mH	12.55	12.64
48.01	48.29	400mH	53.74	54.17
8.38	8.29	走高跳	7.04	6.95
17.47	17.27	三段跳	14.72	14.55
2.37	2.33	走高跳	2.00	1.97
5.90	5.79	棒高跳	4.80	4.73
21.68	21.20	砲丸投	20.00	19.26
67.98	67.19	円盤投	67.18	65.50
79.92	79.00	ハンマー投	75.75	74.94
87.46	85.97	やり投	66.36	65.08
8.55.00	8.43.55	十種競技/七種競技	6.58.4	6.49.50
2:04.40	2:07.23	マラソン	2:20.37	2:22.55
1:18.28	1:19.11	20km競歩	1:26.14	1:28.07
3:40.32	3:42.15	50km競歩		

※2016ゴールドは世界ランク4位平均、シルバーは8位平均
※世界Rank4位、8位の記録は2012、2013、2015、2016の平均記録で算出

2017年シーズンの抱負

強化委員会

男子100m/200m/4×100mR（ゴールドターゲット）オリンピック強化コーチ 苅部 俊二

男子ショートスプリントは、2016年リオデジャネイロ・オリンピック男子4×100mRにおいて日本トラック史上最高となる銀メダル獲得を果たし、世界に通用することを証明した。リレーで結果を残した今、2003年パリ・世界選手権の末績慎吾選手（当時：ミズノ）の200m 3位以来の個人種目での世界レベル大会入賞を目指したい。すでに2017年3月、オーストラリアで、オリンピック4×100mRのメダリストである山縣亮太選手（セイコー）と桐生祥秀選手（東洋大学）が100m走で、それぞれ10秒06、10秒04で走り、ロンドン世界選手権の参加標準記録を突破、日本人初となる9秒台も現実味を帯びてきた。ケンブリッジ飛鳥選手（ナイキ）を含め、9秒台を狙える選手は複数おり、いつどこでだれが出すかという状況である。200mでは、飯塚翔太選手（ミズノ）を筆頭にリオオリンピックに出場した高瀬慧選手（富士通）、藤光謙司選手（ゼンリン）、アメリカの大学に進学したサニブラウン・ハキーム選手（フロリダ大学）など、世界選手権入賞を狙える位置にいる選手が100mと同じように複数存在する。この層の厚さがリレーの成績に反映しているといえる。男子ショートスプリント強化コーチとして、彼らが存分に力を発揮できるよう最大限にサポートしたい。

男女競歩（ゴールドターゲット）オリンピック強化コーチ 今村 文男

昨年11月より伊東強化委員長のもとオリンピック強化コーチを拝命いたしました。

今回の強化体制において、競歩種目は、ゴールドターゲットに指定され、2020年東京オリンピックにおいては、金メダル獲得を目標に使命感をもって強化を図りたい。2017年シーズンは、世界陸上ロンドン大会において成果につながる強化事業の展開と2020年東京オリンピックを視野にいった育成強化事業を推進していかなければならないシーズンでもある。そこで、2017年の競歩ナショナルチームの強化方針として、男子50km競歩：U23世代を中心にボトムアップ強化ヘシフトし、世代交代と2020年東京オリンピックへ向けたタレント発掘と育成に取り組んでいきたい。男子20km競歩：U23世代を中心としたプルアップ型強化合宿の実施、女子20km競歩：期分けに応じた基礎体力向上合宿、持久力向上合宿など女子種目の課題改善に特化した強化事業を推し進めたい。また、2018年以降の主要国際競技会は、高温多湿環境下で行われるため暑熱環境下における種々の測定を実施する。より効果的な医科学サポートを通して、個人差に配慮した暑さ対策を検討していきたい。特に、暑熱環境下で行われる競技会におけるレースペースの検討、給水の摂取量と組成の検討、競技ウェア対策を最優先事項として取り組んでいきたい。

男子400mH（メダルターゲット）オリンピック強化コーチ 磯 繁雄

○方針

本来、強化の視点は目標に対して多くの競技者が対象となるレベルアップ方式が一般的です。しかし、2020年東京オリンピック大会を念頭に考えると、目標に可能な競技者を中心に計画せざるを得ない状況である。

そこで男子400mHの目標は、2020年東京オリンピック入賞以上、できればメダル獲得を最終到達点とする。

○強化選手選考基準

2017年 前年度世界24位相当の記録またはダイヤモンドリーグ出場者等

2018年 前年度世界20位相当の記録またはダイヤモンドリーグ出場者または2017年世界陸上決勝進出者等

2019年 前年度世界18位相当の記録またはダイヤモンドリーグ出場者等

2020年 2017～19年基準を満たすと同時に東京オリンピックで決勝進出が見込まれる者

○2017年具体的な目標

ロンドン世界陸上決勝進出を第一の目標とする。実現には、準決勝で48" 3台で走る能力が必要と推定している。

○活動環境

ダイヤモンドリーグを中心に国際競技会に参加する選手は、競技成績だけを求めるのではなく、選手間の交流を深めると共に海外でトレーニングすることを推奨したい。このことは、トップ選手間の友好関係が生まれることで、様々な大会ストレスを緩和すると共に、選手が環境を獲得することで、2020年東京オリンピックのホスト国として重要な役割にもつながるはずである。

男子棒高跳（メダルターゲット）オリンピック強化コーチ 吉田 孝久

2016年に行われたリオデジャネイロオリンピックには山本聖途（トヨタ自動車）と荻田大樹（ミズノ）、澤野大地（富士通）が出場し、澤野が64年ぶりとなる入賞を果たした。

今回の新体制では、男子棒高跳はメダルターゲット種目に指定されているので4年後の東京オリンピックでのメダル獲得に向けた強化を行いたいと考えている。それには記録的には日本記録以上が求められるが、今年はそのための土台作りとして基礎体力の向上と将来につながる技術獲得を目指している。

トレーニングの経過は、山本と澤野は年末から年始にかけてアメリカでの合宿を行い、山本は1月のリノのポールボルトサミットに出場した。荻田は1月に国内で体力トレーニングをじっくり行い、2月中旬から3月にかけてアメリカ合宿、沖縄合宿で跳躍練習を中心に行った。沖縄合宿には山本も参加し、二人で技術練習を行いながら屋外の

シーズンに備えている。

今季目標とする試合はロンドンの世界陸上である。2～3年後のより大きな飛躍が目標だが、ここには出場してそれぞれの現在値を確認しておきたいと考えている。そのためプランとして4月上旬からアメリカでMt.SACリレー等に出場し、国内では織田陸上とGGP川崎で参加標準記録ならびに派遣設定記録を突破したいと考えている。

男女やり投(ゴールドターゲット)オリンピック強化コーチ 田内 健二

現在の日本における男女やり投の競技レベルは過去最高となっている(2016年度男子10傑平均:79.08m、女子10傑平均:58.03m)。2017年度は、新しい強化体制となった後の初シーズンであることから、東京オリンピックでの成功を念頭においた日本のやり投界全体の競技力向上を目標として、男子では10傑平均を80m以上、女子では10傑平均を60m以上に引き上げたい。そのためには、所属や年代の垣根を越えた選手およびコーチ間の交流を促し、国際レベルの情報(国際試合の経験、海外合宿での指導方法など)の共有化を図ることが必要であると考えている。そのためあらゆる手段を講じていきたい。また、2017年度はロンドン世界選手権が開催される。ここでは、最低目標として、男女ともに複数名をエントリーさせること、そしてその中から、男女ともに1名以上の入賞を果たすことを目指したい。具体的には、男子では2016年度80m以上の投てきを記録している新井、村上、長谷川、女子では60m以上の投てきを記録している海老原、北口、宮下を中心として、一人でも多くの選手が参加標準記録を突破してもらいたい。また、男女ともに若い世代が順調に記録を向上させており、このまま世界レベルまで到達してもらいたい。

女子長距離(メダルターゲット)オリンピック強化コーチ 野口 英盛

2017年の最大のターゲットとなるロンドン世界陸上では、女子長距離ブロックとして10000mベスト10入り、5000m決勝進出を目標に掲げたい。そのためにリオオリンピックを経験したメンバーを中心とし、ここ数年実施してきた3月アルバカーキー選抜合宿、大会事前高地合宿を継続して行い、目的と意識を高めて本番に向けて準備していく。

本大会においては、以下2点を各専任コーチと連携を図り、目標達成に向けてサポートしていく。

- ①ベストパフォーマンスを発揮できる状態で臨んでもらう(自己記録、シーズンベスト)
- ②各国の出場選手の情報収集と分析を行いレース戦略に活用してもらう

また東京オリンピックに向けた新たな取り組みとして今年度からJISSにて年数回の国内合宿を継続的に実施、情報と知識の共有、実践によって選手の意識改革を進める。具体的目標として東京オリンピックまでに10000m、5000mの両種目の日本記録(30'48"89/14'53"22)を更新したい。そこに到達するために今年度はスピード強化(3000mの走

カアップ)を重点において取り組んでいく。

これらの強化策を基に東京オリンピックまで覚悟を持って女子長距離ブロックの強化に尽力していきたい。

男子マラソン(メダルターゲット)オリンピック強化コーチ 坂口 泰

世界陸上ロンドン大会の選考を兼ねたマラソンシーズンが終了した。井上大仁(MHPS)、設楽悠太(ホンダ)ら若手のレースは、マラソン新時代の到来を期待させるものであった。

しかし、男子マラソン全体をみれば停滞感に支配されていることは否めない。その一因は駅伝が中心となりマラソンがパートタイムになっていることにある。

東京オリンピックに向け瀬古利彦リーダーのもと、マラソン強化プロジェクトが発足した。その主要な役割の一つがフルタイムマラソンランナーを育成するための意識・構造改革であると認識している。日本男子マラソンの潜在力は高い。一人でも多くの指導者、選手が覚悟をもってマラソンに挑んでほしい。

具体的な強化策としては、海外における高地トレーニング合宿、あるいは、脚づくり、基礎持久力の強化を中心とした合宿を実施したい。暑さ対策としては、レース同時期・時刻に都内を走るということもしなければならないと考えている。

1964年東京オリンピック最終日、円谷幸吉選手が銅メダルを獲得した姿は、今でも多くの人の心に強く残っている。マラソンへの期待は高い。メダル獲得を実現するため長距離・マラソン界の力を結集しなければならない。

女子マラソン(メダルターゲット)オリンピック強化コーチ 山下佐知子

今を逃したら、低迷、停滞と言われているマラソン界は何も変わらない、やるなら今しかない、と言う一念で女子マラソンオリンピック強化コーチを引き受けさせて頂きました。関係者の皆様のお力添え無くしては何も出来ないと考えていますのでこの場をお借りしてご協力をお願い申し上げます。

今年の最重要ミッションは、2020年のオリンピックに向けた強化指針を現場に示し、選手ごとに東京オリンピックまでのプランを立て強化を開始する事です。オリンピックまで3年弱という時間を考えると今年度より中長期プランに則ったマラソンの為の土台作りを開始する必要があります。

8月の世界陸上においては、代表に決定した安藤さん、重友さん、清田さんには選考レースで見せた素晴らしい力をそのまま本番で発揮して欲しいと思います。また世界陸上後には強化対象選手と専任コーチ、強化スタッフにJISSに集まって頂き、東京オリンピック開催時期と似た気象条件下で暑熱対策をメインとした1週間のオリンピックプロジェクト合宿を実施予定です。活発な意見交換が出来るムード作りも目標のひとつにして熱気溢れるマラソン界を目指します。

ダイヤモンドアスリート やり投フィンランド合宿報告

和歌山北高校 森下康士

1. 参加者

長 麻尋 (和歌山北高校2年) 日本陸連 ダイヤモンドアスリート

2. 日程・合宿先

2017年2月12日(日)～2月20日(月)

フィンランド 国立トレーニングセンター「Pajulahti (パユラハティ)」

3. 現地指導者

キンモ・キンスネン氏 (世界選手権東京大会 男子やり投金メダル)

4. トレーニングメンバー

【関東学連】小椋健司選手(日大)、佐道隼矢選手(東海大)、工藤辰郎選手(東海大)

北口榛花選手(日大)、與名本稔コーチ(東海大)

*北口選手はダイヤモンドアスリートであるが、今回は関東学連として参加

【フィンランド】 Jami Kinnunen (78m12)

【ラトビア共和国】 Zigismunds Sirmais (86m66) 2016欧州チャンピオン

Lina Muze (62m09) *女子選手

5. 経緯

2015年に始まったフィンランド合宿が今回で3回目である。長と私は、今回が初めての参加となるが、初回に参加した北口榛花選手・工藤辰郎選手の動画を永井啓太先生(日本陸連強化育成部:今治明德高校)にお借りし、日々その動画を参考にトレーニングをしてきた。フィンランドは、様々なトレーニングをはじめ、やり投の確たる技術や歴史と伝統がある。そのため、長がダイヤモンドアスリートに選ばれ、海外合宿を実施することが可能となり、かねてから切願していたフィンランドでの合宿に参加する運びとなった。

また、今回はキンモ氏の息子である Jami Kinnunen 選手、ラトビアの Zigismunds Sirmais 選手、Lina Muze 選手といったキンモ氏にコーチングを受けている20～25歳の若手世代のトップ選手をはじめ、関東学連やり投チームに帯同させていただいたこともあり、質の高いトレーニングができ、英語でコミュニケーションを図り充実した合宿が実施できた。

6. トレーニング施設、宿泊施設について

パユラハティは、例年実施している施設であり、フィンランドに4か所ある国立スポーツセンターの一つである。首都ヘルシンキからはバスで1時間半、タクシーで20分程度のラハティという町にある。フィンランド特有の森と湖に囲まれた、自然豊かな施設である。

宿泊施設も兼ね備えてあり、食事は三食バイキング方式でバランスの良いメニューであった。部屋は、シャワー、トイレ、ベッド、テレビが完備され、施設内はWi-Fiが繋がっており、薄着で過ごせるほど適度な温度管理がされており快適であった。また、障害者スポーツ施設の中心としても位置づけされており、館内はバリアフリーに改装され、施設内にはフィンランド名物のサウナ(氷の湖に入水可)も完備されている。

主たるトレーニング施設はパユラハティホールという屋内練習場である。1周300mのオールウェザー走路が3レーン、ネットに向かってハンマー投、円盤投、やり投とそれぞれに独立し投げる投擲エリア、ウエイトトレーニングエリア、サッカー用の人工芝がインフィールドにあった。ま

た、棒高跳ビットも常設しており、1月に江島雅紀選手(荏田高校)が、5m50のU20日本タイ記録とU20室内日本記録を達成した場所でもある。

7. トレーニング内容

【1日目(2/13)】

(19:00-21:00) 柔軟、肩甲骨周りのストレッチ、Jog、ハードル補強

【2日目(2/14)】

(9:30-12:00) フットサル、メディシニングボール、ironボール、ミニハードルクロス練習

(15:30-18:00) フットサル、ironボール、投擲練習、ウエイトトレーニング(スロースナッチ)

(19:20-21:30) ウエイトトレーニング(スローベンチプレス、クリーン&ジャーク、ダンベルを使って技術練習)

【3日目(2/15)】

(9:30-12:00) チューブ、ironボール、プレート補強、ミニハードルドリル、サーキット

(14:45-17:00) ウエイトトレーニング(スナッチ、クリーン、フロント&バック&オーバースクワット)

(20:00～) サウナ

【4日目(2/16)】

(9:30-12:00) ウエイトトレーニング(プルオーバー、バックプレス、プレス、ハーフスクワット)

(14:45-18:00) 投擲練習

(19:00～) マッサージ

【5日目(2/17)】

(9:30-12:00) トレーニング(プレート振り上げ、シャフトツイスト、プレート腹筋、ラダー、ダンベル肘返し等)

(14:45-18:00) フットサル、300mペース走、クロス走、やりを保持しての技術練習およびストレッチ

(19:30-21:30) フットサル、レスリング、バランスボール補強

【6日目(2/18)】

(9:30-12:00) メディシニングボール投擲あて14種類、ironボール

(15:00-18:00) 投擲練習(短助走)、プレート肩入れ、300×3

(20:00～) サウナ

【7日目(2/19)】

移動日

8. トレーニング全般について

キンモ氏が事前に與名本コーチ(東海大)を通じてメールでスケジュールを伝えてくれており、それをもとに指導を行ってくれた。トレーニング内容は、以前に永井先生から教わっていた通りで、午前・午後・夜と3部構成であり、基本的な技術練習をはじめ、あらゆる器具を使って工夫されたトレーニングであった。また、同じ種目を長く多く実施する日本のトレーニングと違い、複数の種目を3～5回程度の少ない回数やセット数であらゆる方向に動かし、リカバリーでjogや流し、クロス走をするなどサーキットトレーニングに近い内容であった。

ウエイトトレーニングでは、リフティング専門のコーチがおり、上半身に頼りがちな日本人選手特有のフリーウエイトでなく、脚からの連動というリフティングの基本動作を徹底的に指導してくださり、軽い重量であったがかなり

の負荷であったようである。

投擲練習では、ネットに向かってやりを投げ、その都度キンモ氏がすぐ横にあるモニターで動作チェックをしながらアドバイスをくれた。常にキンモ氏は、投擲練習やメデイシングボール等、自ら見本を示し指導してくれたのが印象的であった。

また、あらゆるトレーニングの前後にironボールと呼ばれる400g～1kg程度のテニスボールほどの小さいゴム製のボールで遠投やネット投をして、技術確認をした。

日本の高校においても、サーキットトレーニングが主流になっている。しかし、やり投選手は、肘や肩の故障が一番の課題である。よって、基礎体力の強化だけでなく、専門性を高める基礎体力の強化が図れているフィンランドのトレーニング方法は、高校生～大学生のジュニア期の選手には有効的で効率のよい方法であると感じた。

9. 合宿を通しての感想

長は元々人見知りをする選手であるため、当初心配したのがキンモ氏とのコミュニケーションである。しかし、北口選手がキンモ氏のコーチングをよく理解し、また、すべての内容を通訳しながら長に伝えてくれるなど心強かった。また、キンモ氏の父親のような温かい人柄で、時間が経つにつれコミュニケーションが図れるようになってきた。私は、最小限のサポートを心掛け、本人に様々なことを経験させることを優先した。

長は海外遠征を何度か経験しているが、ほとんどアジア地域であったため、初めてヨーロッパを経験し視野が広がったようである。また、2018年のU20世界陸上(世界ジュニア)はフィンランドのタンペレで開催されることもあり、より世界で戦っていく覚悟が感じられた。

今回最も印象的だったのが、北口選手と共に過ごしたことである。ダイヤモンドアスリートの先輩として、世界と戦っている北口選手は、長にとって目標である。私自身、この合宿に参加するまでは、北口選手とどうやったら戦えるか?と漠然と考えていた。しかし、学生である北口選手は、キンモ氏と積極的に英語でコミュニケーションを図り、探求心旺盛でやり投を追求し、世界選手権、オリンピックを見据えてトレーニングに黙々と励んでいた。そういう成長・進化している北口選手を身近にして、一緒に世界の舞台で戦わせたいと強く感じた。

10. 長 麻尋の感想

今回、多くの方々のおかげでフィンランド合宿に参加でき本当に良かったです。日本とは異なる環境で、トレーニング内容、コーチなど全て英語での会話で、苦手意識があり最初は戸惑いました。しかし、徐々に聞き取れるようになり、片言の英語でも、もっとコミュニケーションを取ればよかったと思えるようになりました。

練習では、普段あまりしたことのない新たなトレーニング方法や、肩周りのストレッチ方法など知ることができ

ました。技術的には日々注意している点を指摘してくれ、頭で理解はできていますが、まだ体で表現できていないので、一つ一つ修正し自分のものにしていきたいと思います。

この合宿で教わったことを、継続して取り組んでいき、さらに成長できるように頑張ります。

11 今後の課題

私は合宿後半に、キンモ氏に「マヒロ(長)は60m投げることができるか?」という質問をした。キンモ氏からは「body strong!」という、シンプルかつ奥深い言葉が返ってきた。

今後の課題としては、一番は強い体づくりをすること。技術的にはアドバイスをくれた肘の位置、左肩の位置、インパクトのある投げという点をしっかり反復して体得させたい。また、英語をはじめ、コミュニケーション力をしっかり高め、あらゆる状況でも対応できる逞しさを身につけさせたい。希望としては、来年度もぜひフィンランドで合宿を実施し、キンモ氏のコーチングを受け、単年のものにならないようにしたいと考える。そのなかで、修正や確認をしながら吸収すべき技術やトレーニングを積極的に取り入れ、私が永井先生から影響を受け、きっかけをつかんだように、日本のやり投のさらなるレベルアップをはかれるように伝えていきたい。

やり投におけるオリンピックメダル獲得数はフィンランドが世界のトップである。しかし、日本と違って、野球の文化は全くといっていいほどなく、ほとんどバスケットボールやアイスホッケー経験者であるようだ。しかし、コントロールテストとやり投の飛距離を表した国内に共通の指標があり、やり投の実績、伝統、指導のノウハウが圧倒的に豊富で確立されている。また、入国審査で「javelin throw camp」と伝えたら「ピトカマキのところへ行くのか?」といった言葉が返ってきた。それだけフィンランドという国がやり投に関心が高いと感じた。

2020年東京オリンピックでは、日本選手がフルエントリーし、フィンランドをはじめ世界のトップと戦っていかれることを強く願っている。



2017JRDM(ジャパンレースディレクターズミーティング)報告

昨年に続く2回目の開催となる『2017ジャパンレースディレクターズミーティング(JRDM)』を2月24日(金)ベルサール新宿セントラルパーク(東京都新宿区)において開催しました。

本会は全国からマラソン大会等で運営にあたる方々や都道府県陸上競技協会の方々を対象に、日本陸連、スポーツ庁、ロードレースコミッションからのプレゼンテーション、およびパネルディスカッションを通じ、国のスポーツ施策、日本陸連が掲げる「ウェルネス陸上」の理念に対する、市民マラソンの今後のあり方について検討をすることを目的に開催されました。

当日は200名を超える方々の参加をいただき、活発な議論や情報交換がなされました。

【プレゼンテーション①】

【日本陸上競技連盟の今後の取組について】

尾縣 貢 (日本陸上競技連盟 専務理事)

尾縣専務理事は、昨年新たに掲げた「ウェルネス陸上」の理念を、スポーツ庁の取り組む「成人の運動実施率の向上」を踏まえた「日本陸連中長期計画」(現在策定中)に落とし込み、市民マラソン大会の発展およびランニングの普及に対する日本陸連が取り組むべき方向性について述べました。

- ・スポーツ庁は週1回以上の運動実施率向上させる数値目標として、平成33年度末までに全人口の2/3(6,000万人)のスポーツ習慣化を掲げている。日本陸連はその1/3にあたる2,000万人をランニング人口で達成したい。
- ・課題は女性参加率の低さにある。年間のフルマラソン完走者数、各大会の参加者構成をみても女性参加比率が少ない。距離にこだわらず、女性のランニング大会参加を促進していく
- ・更にランニングをよりライフスタイルに根ざしたものにするために、日本陸連は大会の発展を支援するとともに、大会以外でのより日常でのランニング活動を環境づくりを推進していく
- ・具体的には経済産業省が指定した「プレミアムフライデー(月末金曜)」を「JAAF Run My City(仮称)」として、ランニングきっかけづくりとし、あわせて正しいランニングの普及活動を実践する。

【プレゼンテーション②】

【スポーツを通じた健康増進・地域活性化】

岡崎 健一(スポーツ庁健康スポーツ課 課長補佐)

岡崎健一課長補佐は、スポーツ庁が取り組むミッションに触れつつ、ウェルネス陸上と関わりの深い、スポーツを通じた健康増進や地域活性化など、新たなスポーツ施策を

中心に説明しました。

- ・スポーツ庁においては、平成29年度予算案に、地方公共団体においてスポーツに興味・関心を持ち、習慣化につながる取組への支援や、国民の心身の健康の保持増進を図るためのスポーツガイドラインの策定、官民が連携してビジネスパーソンがスポーツに気軽に取り組める機運の醸成を図る国民運動などに取り組む費用を計上しています。
- ・また、スポーツツーリズムは、出発前のスポーツ用品やファッション等の購入、旅先でのイベント参加・観戦など、通常のツーリズム以上の関連消費も期待でき、スポーツGDP拡大と、交流人口の拡大の両方に大きく寄与する産業と言えるため、スポーツ庁としてはスポーツツーリズムも盛り上げていきたいと考えています。
- ・今後も日本陸連と連携しつつ、国民の誰もが年代や関心、適正等に応じて日常的にスポーツに親しむ機会を充実させていきたいと思います。

【プレゼンテーション③】

【ロードレースコミッション報告】

大嶋 康弘(日本陸上競技連盟 事業部長)

大嶋康弘事業部長は、昨年ロードレースコミッションの創設を宣言してから同コミッションの取組について報告しました。

- ・イギリスではロンドンオリンピックに向けてイギリス陸連、国内大会、クラブチーム、地方の代表から構成された「runbritain(ランブリテン)」を設置する等、世界的に競技団体が市民ランナーの環境整備に取組む傾向にある中で、日本陸連の「ウェルネス陸上」の理念を実現をする組織として設置された。
- ・ロードレースコミッションの活動は「安心・安全な大会の実現」「正しいランニングの普及」が2本柱とし、「各大会との連携」「大会運営基準」「普及活動」「ランナーと大会のプラットフォーム」の4つのワーキンググループ(以下、WG)に分けて活動を進めている
- ・WG1の役割は「各大会の連携」。今後、レースディレクター(大会担当者)を組織体として「Road Race Director's Club」(仮)を設置し、会員に対してニュースレターや研修会の案内等の情報交換を行う場を作っていく
- ・WG2では「安心・安全な大会づくり」を議論し、大会担当者のタスクリストである「Road Race Director's Handbook」(仮)や各大会の事例集などを作成し、今後の大会運営に関する一定の基準を設定していく
- ・WG3は「正しいランニングの普及」に取り組んでいる。日本陸連ランニングクリニックサポートプロジェクトを



立ち上げ、各大会でのランニングクリニックに日本陸連公認指導者を派遣する。

- ・「ランナーと大会のプラットフォーム」を担当するWG4は、登録者情報・エントリー履歴・大会の記録などを一元管理できるプラットフォームを検討している

【パネルディスカッション】

<パネリスト>

- ・尾縣 貢 (日本陸連 専務理事)
- ・大嶋 康弘 (日本陸連 事務局事業部長)
- ・前河 洋一 (日本陸連 普及育成委員会 ランニング普及部 部長)
- ・早野 忠昭 (東京マラソン レースディレクター)
- ・岡村 徹也 (名古屋ウィメンズマラソン 事務局長・レースディレクター)
- ・前島 信一 (長野マラソン 大会事務局 運営統括担当)

<ファシリテーター>

- ・金 哲彦 (NPO法人 ニッポンランナーズ 理事長)

パネルディスカッションには、上記6名のロードレースコミッションメンバーが登壇し、来場者への事前アンケートをもとに、ファシリテーターの金哲彦氏がアンケート結果や事例に対して会場とパネリストの意見を交互に聞きながら分析を行いました。

また、コミッション活動の具体例としてWG3の前河部長がつとめる大会と連動した普及活動(ランニングクリニックサポートプロジェクト)の紹介を行いました。

大会側からは警備体制やボランティアなど運営スタッフの確保に対する課題が挙げられ、救護体制と合わせて、警

備、救護、ボランティアが主たる運営課題であることが共有されました。

<参加者からの声>

- ・フルマラソン開催となると警備費用がかさむ、警備員確保が困難
- ・警備員が多すぎると全員に伝達が伝わりきらないこともある
- ・ボランティアの高齢化がすすみ、若いボランティアが少ない
- ・新たなボランティアの発掘をしたい

<パネリストからの意見>

- ・大会開催による経済効果を向上させるには、大会前日当日の宿泊やショッピングだけでなく、より期間を長くしたムーブメント作りによって成果が得られる
- ・大会の意義を明確なミッションとして掲げ、その意義を参加者や地域の皆さんに伝えることの意識が重要だ
- ・ボランティアの業務をより広範囲にとらえ、救護や警備などの運営業務にあたるような仕組みも検討できるのではないか

【懇親会】

パネルディスカッション終了後、各大会の皆さんとコミッションメンバーによる懇親会を開催し、直接の意見交換を行いました。また懇親会では金哲彦さんが直接マイクを持ち、来場者の意見をうかがう機会にもなりました。

最後は大嶋事業部長が謝辞を述べ、第2回のJRDMは終了しました。



スポーツ振興基金
独立行政法人日本スポーツ振興センター



第208回 国際陸上競技連盟 (IAAF) カウンシル会議 報告

会長 横川 浩

第208回国際陸上競技連盟カウンシル会議（2017年2月6日）がモナコで開催されたので、国際陸上競技連盟 (IAAF) のカウンシルメンバーとして参加した。同会議の概要は以下の通りである。

1. ロシア問題

- ルネ・アンデルセン調査団長からの報告を受け、ロシア陸上競技連盟 (RUSAF) の資格停止処分解除の見送りを決定した。資格停止処分解除の条件としては、①世界アンチ・ドーピング規定及びIAAFアンチ・ドーピング規程の遵守体制が確立されている事 ②IAAF及びロシア・アンチ・ドーピング機構 (RUSADA) が外部の圧力を受けずにドーピング検査等を行えるアンチ・ドーピング体制が確立されている事 ③その結果、ロシア選手の国際大会への参加が、スポーツのインテグリティを脅かさない事、が挙げられる。前回の報告 (2016年12月) からは、一定の改善も見られたが、残る課題としては、①ロシア関係者による非協力的な発言が公に行われている事 ②資格停止処分を受けているシニア・コーチ (Vladimir Kazarin) が継続して指導を行っている事 ③ロシア選手への検査体制が十分に徹底されていない事、が挙げられる。検査体制の問題点としては、①検査逃れを試みる選手がいる事 ②検体の保管容器を開封しようとした形跡がある事例が報告されている事 ③ロシア当局が、ロシアで検査されたABPサンプルの提供の拒否をしている事 ④軍支配下等の閉鎖都市にいる選手への接近が制限されている事、が挙げられる。
- ロシアの資格停止処分解除の要件の一つとなる、世界アンチ・ドーピング機関 (WADA) によるRUSADAの再認定が、今年11月に判断される見通しのため、8月に開催される世界陸上競技選手権ロンドン大会への出場は絶望的となった。
- IAAF規則22.1 (a) に従い、ロシア陸連に所属する選手は、“中立”の立場の個人資格で、国際大会に出場する事が出来る。この審査作業を促進するために、ロシアのIAAF検査対象登録選手 (IRTP) が60名以上に増加されたが、これは、当該選手の参加権利を約束するものではなく、IAAFドーピング審査委員会が審査を行う。
- U15の選手については、国際大会への参加が認められ、その中には、2017年7月にハンガリーで開催される、ヨーロッパ・ユース・オリンピック・フェスティバルも含まれる。

2. 国籍変更問題 (加盟団体代表となるための資格)

- カウンシルメンバーは、IAAF憲章に定められた権限を行使して、IAAF規則5.2 (b)、5.4 (d)、5.4 (e) を無効にし、国籍変更申請の凍結を2017年2月6日付で即効した。但し、2月6日までに受理した申請15件については、審査を実施する。
- アフリカ諸国を中心に国籍変更が頻繁に行われており、選手を含めた、様々な関係者から、スポーツの発展やインテグリティに影響を及ぼしているという意見が出ている。現在のIAAF規則、仕組みは、実状に則しておらず、その目的を果たしていないと考えられるため、筆者が委員長を務めるワーキンググループで、新たな規則の提案を、遅くとも本年末迄に行う。

3. 利害対立、利害開示、贈与に関する規則

- 上記規則は、行動規範 (Integrity Code of Conduct) の

中に記載され、4月3日より有効となる。規則の詳細については、各加盟団体にサーキュラーとして送付される。

4. IAAF コンベンション

- 8月2日に、第51回IAAF総会と世界選手権ロンドン大会に合わせて開催され、プログラムは、基調講演、パネル討論会、作業部会から構成される。テーマは4つに分かれ、マーケティング、インテグリティ/ガバナンス、テクノロジー、ディベロップメントとなる。

5. エリア・エンパワメント・プロジェクト

- IAAF戦略の重要課題に対して、各エリアが分担して、調査や検証を実施する。検討結果は、コンGRESで報告される。各エリアの担当は、次の通りである。①アフリカ：国籍変更 ②アジア：競技カレンダー ③ヨーロッパ：記録と1 Day Meeting ④NACAC：ジェンダー・リーダーシップ ⑤オセアニア：エリア・リプレゼンテーション ⑥南米：ガバナンス/インテグリティ

6. アンチ・ドーピング

- 2016年3月のカウンシル会議で、5か国 (エチオピア、モロッコ、ベラルーシ、ケニア、ウクライナ) のアンチ・ドーピング体制を、IAAF規定30.6に従い、IAAFの監視下におくことを決定した。今会議ではその進捗状況が報告されたが、世界選手権ロンドン大会に向けて、その改善が充分でないと判断し、ウクライナは毎月、ベラルーシ、エチオピア、ケニアについては、3か月後に報告を行う事となった。モロッコは、改善が見られ、条件を満たしていると判断されたが、少なくとも今後1年間は監視下におく事とした。
- 今後、IAAF規定30.6に違反した加盟団体は、2年以上監視下におき、かつ条件を満たした1年後まで継続する事とした。

7. インテグリティユニット

- 2016年12月の臨時総会で、独立したインテグリティユニットの設置が承認され、2017年4月より運営開始となる。2017年1月以降、IAAF審査規程の承認、審査パネルの指名等が実施された。インテグリティユニット委員長を含むメンバーの選定が現在行われている。

8. U18世界陸上競技選手権

- 大会事務局の体制強化により、7月12日からの開催に向けて、準備状況は大きく改善したと報告された。大会の成功に向け、ケニア政府、地元自治体、ケニア陸連が協力し、特に安全面では、ケニア警察や軍と協力して万全の体制が確立される。大会開催時のナイロビの日の平均気温は約22℃で、夜間には約12℃まで冷え込む。
- 競技会場は、1987年建設のThe Moi International Sports Centre (Kasarani) で、5月中旬には改装が終了する予定である。懸案事項となった選手村は、5月下旬にはケニアアッタ大学の寮の改装が完了する。

9. IAAF主催大会の開催地決定方法

- 世界陸上競技選手権を含む、IAAFワールドアスレチックシリーズの開催に対する、入札方法を変更する。各大会の目的、戦略を明確化し、その目的を達成するために最も適した国の都市を開催地のターゲットとする。これにより、主催地とIAAFの目標や戦略を統一化し、真のパートナーシップを築く事が出来る。本決定方法は、2021年以降の大会より採用する。

国際陸上競技連盟 (IAAF) 技術委員会報告

陸連事務局事業部国際専任部長 関 幸生 (IAAF 技術委員会委員)

2017年3月12日(金)～13日(土)、スペインのサラゴサでIAAF技術委員会会議が開催された。通常はIAAF本部があるモナコで開催される会議だが、今回はIAAFパートナーである用器業者の工場所在地で、工場見学を兼ねた日程となった。

本年は、8月にIAAF総会がロンドンで開催されるが、IAAF憲章では、選挙が主目的の総会と規則修正が主目的の総会を2年ごとに交互に実施することになっており、本年は規則修正が主目的であり、加盟団体(各国陸連)から事前に寄せられた提案の検討に今回は、多くの時間を割くことになった。なお前回総会までは、規則修正は、IAAF理事会承認を経て、総会で決定という手順を取っていたが、今次総会からは、IAAF憲章の改定により、理事会が決定、総会には報告のみとなっている。

技術委員会は、「競技規則に関するすべての問題を取り扱う」とされ、委員長と17名の委員をもって構成されている。大陸別では、ヨーロッパが10名と過半数を占め、北中米カリブが3名、アジアが中国の日本の2名、オセアニア、アフリカ、南アメリカが各1名となっている。ロシアの委員は、同陸連が資格停止中であるため出席がかなわなかった。

今回の委員会会議の主要議題である規則の修正のうち、加盟団体から提出された提案は、技術委員会が内容を検討し、採用に値するか(+)否か(-)の別を明示して理事会に提出する流れとなっている。技術委員会で(-)評価を受けた提案は、理事会では、議論の対象にもならないので、規則の修正においては、技術委員会内でいかに理解を得るかが重要となる。

今年は、加盟団体から提案のあった43件の審議と、委員会が継続して検討してきた規則修正27件についての取りまとめ、規則運用の解釈についての議論等をおこなった。今次、日本としての提案はなかったが、本連盟競技運営委員会と施設用器具委員会が議論となっている内容については、私の委員就任以降、多数、提案や問い合わせという形で議題に入っており、今回の修正案にも日本の事情を考慮した内容が含まれている。

規則に関するといってもその内容は多岐に及ぶため、3つの分科会を設け、事前検討した結果を全体会議で審議するという会議の進め方をとっている。全体会議で委員の賛成を得た案件についてのみ、4月にロンドンで開催されるカウンスル会議(理事会)に提案され、承認を待つことになる。3つの分科会は、「競技規則」、「施設用器具」、「テクノロジー」であり、私は施設用器具部会長に指名されている。

なお理事会で承認されたIAAF規則修正は、本年11月1日から有効である。ただし、国内で適用される日本陸連競技規則としては2018年4月1日から有効となる。

◆IAAF新体制と変革

2年前に就任したセバスチャン・コー会長のリーダーシップにより、昨年12月にIAAF憲章が大幅に改定された。選挙により委員が選出されるIAAF委員会は2019年までの任期をもって廃止となり、以降、IAAF理事会推薦によるコミッションとなることが決まっている。

コー会長就任にあたっての「陸上競技をより魅力的なものにする」という公約を受けて、委員会での議論では、「規則がどうあれば、陸上競技が魅力的なスポーツとなりうるのか」を念頭に置くよう求められている。会長からの強い意向を受けて、競技のスピードアップや改革(新たな競技スタイルやシステム)が歓迎されているような印象を強く感じる。

IAAF主催競技会の競技運営の責任者となる技術代表(TD)の任命についても、新しい方向性が示され、より専門性の高い人材をとという方針のもと、IAAF本部スタッフもTD就任することが可能となった。2020年のTDのひとりもIAAF本部から任命される可能性がある。

◆大きな規則改正2件

今回、40件以上の規則修正案が理事会に提出され承認される予定だが、その中で、大きな影響がありそうなのは、つぎの2件である。

1. テイク・オーバー・ゾーンの変更

4×100mや4×200mリレーなどで、テイク・オーバー・ゾーンの手前10mからのスタートが認められている区間では、「その10mも含めたトータル30mの中でバトンパスをおこなえばよい」と規則が修正される予定である。

提案したニュージーランドからは、「仮にゾーンを30mに延ばしても、レースで先頭争いをするチームのバトンパスは、受け手ランナーが最大限に加速した場所、つまりこれまでの20mのエリア内でおこなわれるはずであり、ゾーンを延ばしてもトップチームを有利にするものではない。むしろ、観客は競技を理解しやすくなり、競技役員も判定しやすくなるので、多くに歓迎されるはずである」との説明があり、受け入れられた。

2. フィールドの試技時間の変更

フィールド種目では、残っている競技者数によって、試技時間が定められている。このうち、4人以上で競技する際の「1分」が「30秒」に短縮されることになった。これは、競技会のスピードアップにより、魅力的な競技会運営を目指す、IAAFの強い意向によるものである。昨年1年をかけてIAAFは、フィールド種目の試技時間の統計を取ったという。9割以上が、30秒以内に試技を始めているという結果を受けて、今回の変更提案となった。

他方、優勝が決定した後、世界記録などに挑戦する競技者については、規則に定められた時間よりも、あと1分時間を延長するという修正が承認された。

◆その他の主要修正

1. 緑石(第162条10)。グループスタートの際、内側と外側を分けるために代用緑石を置くのは日本だけのオリジナルで、これまでIAAF規則では旗かコーンとした記載がなかった。今回、日本独特の代用緑石を置く方法が正式に認められた。
2. 砲丸投の表面仕上げ(第188条4)として定められている「ラフネスナンバーN7」を競技場で検査することは不可能であるので、販売時の数値とする。
3. 円盤専用囲い(190条3)の高さを現在の4mから、門口から3m部分は6mとする。なお本規則は2020年1月1日からの施行とする。
4. 混成競技の同得点(第200条12)の場合には同成績とする。
5. 審判長(第125条2)に審判員の決定を覆す権限があることが明文化。
6. 審判員(第126条)は、自身が誤った判定をしてしまったことに気づいたなら再考してよい、と明記。つまり赤旗を白旗/白旗を赤旗に変更してもよい。
7. アナウンサー(第134条)の記載内容すべてが、第124条イベントプレゼンテーションに移動。
8. 公式計測員(第135条)の名称削除。その任務は148条に追記。
9. 性別(第141条3)。昨年5月の競歩チーム選手権競歩の男子50kmに女子選手の出場を認めたことを受け、男子と女子に加え、Universal(共通)というカテゴリーを新設。この場合、ひとつのカテゴリーとして競技と表彰を行う。
10. ジュリー(第146条8)が裁定を審議するにあたり、聞き取りをすべき関係者として審判長を明記。リオで、ジュリーが審判長に聞き取りすることなく裁定を下してしまった事例があったことが理由。
11. スターティングブロック(第161条)。本連盟競技運営委員会内でも、スターティングはどの部分を指すのかという定義について議論があり、IAAF技術委員会に定義していた。現行の英文では「フットプレート」のみをスターティングブロックと定義していることを確認したうえで、今回の改正で、定義をシャフトも含む「全て」に変更することになる。ただし、「スターティングブロックはレーン内になければならない」という規則のままで、シャフト部分がトラック外側に出てしまったケースなどトラブルも想定されるため、「例外として認める」などの補足もあわせた表現が検討されている。
12. スタート(第162.5(c))。他の競技者を妨害する具体例として、音しか例示がなく、実際にもっと事例が多い、「ピ

- クッ」という動きについてルールのどこにも記載がなかったことで、リオでも誤解と混乱があったことから、明記。
- レースにおける妨害（第163条2）。審判長の決定による再レースは、全員で実施する必要がなく影響を受けた競技者のみ、それが1人（チーム）であってもかまわないことを明記。IAAF主催大会では過去にも1人の再レースを実施していたが、リオの女子リレーでアメリカ1チームの再レースの際、ルールの理解が十分でなかったことからより丁寧な記載とした。
 - 試技の完了（第180条8（a））。フィールド種目で旗を挙げ間違えたことが明らかなき、再考してもよいことを明記。
 - 給水（230条10、240条8）。競技者は、自身が手にした飲料やスポンジを他の競技者に渡すことが認められる。しかし、ある特定の競技者にのみ継続して飲料などを手渡しするなど不正な助力とみなされた場合には、警告、及び失格の対象となる。
なお、ペースメーカーは「参加競技者である」とのIAAFの見解により、彼らがある特定の競技者を給水でサポートする行為は、本規定により禁止される。

◆主要議題

規則の修改正のほか、部会ごとの主要議題はつぎのとおり。

【競技規則】

- 「1日で十種競技」。実施については支持するが、規則の変更については今後の検討。
- 競技場で実施される距離のフィールド種目で、レーザーで距離を示す演出がある。その選手がマークした記録を示すことは問題ないが、競技中、トップにいる選手の記録を示すことは認めない。
- すでに2016年大会から試行されているが、IAAF主催大会では、トラック種目で、同成績など説明が必要な状況にあるときには、100分の1秒による正式記録に加え、1000分の1の数値も公式結果に並記する。
- ロンドン世界陸上で、フィールド種目の予選や混成で、上位選手を一方の組に固めて欲しいとの中継サイドからの要望があったが、認めない。
- 1980年のモスクワ五輪、三段跳でのオーストラリア選手の無効試技が誤審だったのではとの訴えに対し、ビデオ画像を精査の結果、現場での判断を支持し、変更は行わない。
- 反発材やバネ入りのランニングシューズなどが多数市場に出回っていることを鑑み、これらを禁止できないことを確認。シューズの規則にある「IAAF承認」という表現を削除する一方で、誰もが手に入れることができる物という表現を加え、国際パラリンピック委員会がその規則に示していると同様に「公平性」を定義づけることとする。
- 規則改正により不正スタートの定義が変更となり、号砲前のピクピクといった選手の動きは不正スタートではないのだが、いまだスターターはじめ競技役員の間で誤解が存在している。こうした問題を解消するには、第162条6で不正スタートを定義した注1を本文に移すなど、よりわかりやすい表現にすべきであるとして、アメリカはじめ複数の国から提案があった。委員会も同感であり、本年11月発行のルールブックでは該当部分の表現が改善されることになる。

【用器具】

- IAAF競技場認証において計測報告書の内容を世界的に均一化させるために検定員向けのセミナー開催を検討する。
- これまで舗装材を張り替えるまで無期限だったIAAF競技場認証を5年更新とし、更新手続き方法についての詳細の検討を進める。2019年1月1日施行とする。（詳細別記）
- 室内砲丸投の囲いの高さを従来の4mから5mに変更し、設置位置はサークルから8mの場所に囲い先方がくるようにする。
- （規則260条13）室内用200mトラックでは半径26m以上に走路を設置することは認めない。
- オーストラリアの製造会社から申請のあった、中央一脚のハードルは認めない。
- 個人の投てき物で、製造会社の都合によるモデルチェンジにより、IAAF認証リストから外れたものでも、検査に合格すれば使用を認める。このことにより、規則187条1の表現を変更する。昨年の川崎ゴールデングランプリで発生した事案を提議したの。
- 日本企業が世界に先駆けて開発し、複数の競技場で実際に敷設されている投てき種目の実施可能な人工芝について、IAAF施設マニュアル改訂版に記載することが確認

された。このことにより、IAAFとして投てき可能な人工芝を正式に認知したこととなり、IAAFクラス認証の競技場に敷設することも可能となる。各国の陸連とサッカー協会が認めることを条件とし、必要があればIAAFに相談するよう記載される。

【テクノロジー】

- スタート・インフォメーション・システム（SIS）の認証がスタートする。申請のあった5社のうちセイコーとオメガを含む3社は合格、2社が保留となっている。2018年11月以降、IAAF認証のない機器の使用は認められない。SISを補完するためのビデオ映像システムについても認証条件への追記を検討中。SISによるリアクションタイム、波形などを写真判定員が正しく理解できる解説を写真判定員ガイドラインに追記する。
- カリブレーションマニュアル（機器の検査マニュアル）の改定版を発行予定。これまで規則上、「approve（IAAF承認）」が必要とあった機器は、「認証（certify）」が必要なSISなどを除き、承認という表現を削除し、「国際基準で検査」されたものという表現に修正する。
- 風向風速計の計測位置の高さの誤差について1m22 ± 5 cmとする。

◆IAAF出版物とルールブック体裁変更

技術委員会は、ルールブックのほか、競技に関する各種の出版物を編集しており、IAAFサイトからダウンロードも可能である。

規則解釈のための「レフェリーブック（審判方法）」と施設関連の規則や条件を詳述する「IAAF施設マニュアル」はルールブックを補完する書物として位置付けられ、ルールブックに記載がなくても、これら2冊に記載があれば、規則と同じ扱いがされてきた。

本年11月に発行されるルールブックについては、大きく体裁が変更となる。2分冊となり、1冊には第5章の競技規則にレフェリーブックの内容を統合、もう1冊はその他の章のアンチドーピング規則を含むことになった。

国際的に推奨される基準が網羅されている「競歩審判法」、「スターターガイドライン」、「国際写真判定員ガイドライン」、「ロードレースマニュアル」といったガイドの発行はこれまでと同じ体裁で継続される。2020年に向けてIAAFの競技運営方法を理解するうえで、日本の多くの関係者に手にしていただけのような方策も考えたい。

◆IAAF承認競技場の更新制度の導入

毎年、時報で報告しているが、IAAFは、競技場及び用器具の承認システム推進を積極的に進めている。競技場認証は、クラス1と2という2つの種別に分かれているが、この制度を担当するのも技術委員会である。この数は世界規模で増加傾向にあり、近年、この認証システムの理解が進んできていると感じる。IAAFやアジア陸連の大会を開催するには承認は必須であり、世界記録及びアジア記録の公認にも必要である。また2020年の東京オリンピック・パラリンピックの事前合宿誘致を目指す自治体にとっては、世界基準のスタジアムは有効なPR材料となる。

IAAFは、世界のどこにいても、すべての選手が同じ条件下で競技し記録が残ることを目的として、承認競技場の世界的普及を推し進めている。そのため途上国でも競技場承認が可能となるよう最低限守るべき基準を設定している。他方、日本には歴史ある競技場の公認制度が存在するが、スタンドの客席数や用器具の必要量の常備などIAAFより基準が厳しいほか、公認期間とその更新も厳格に定めているなど、世界に誇るべきものである。

日本では5年に1回、公認継続のための検定が義務付けられているが、IAAF認証は、これまで、有効期限を設けていなかった。この制度の世界的普及を考えれば、更新の手続きや更新料を設定しないにこしたことがないことは理解できるが、この制度が世界的に認知され認証施設が増えるに依り、問題も少なからず報告されるようになってきた。舗装材や縁石の劣化や破損、また地盤沈下により水たまりのできたトラックなどである。昨年の会議で、認証後5年で再申請（Renewal）を義務付けることが決議された。今回、詳細が議論され、再申請料は新規の半額、IAAF認定の検査担当者による目視による調査報告書の提出、報告書の内容にIAAFが満足しないと認証取り消し、といった内容が決定され、2019年1月から施行されることとなった。施行時、対象となる競技場が200以上あることから、入念な準備と丁寧な周知が必要となる。

大会観戦ガイド

IAAFワールドチャレンジ第2戦 セイコーゴールデングランプリ陸上2017川崎 兼 第16回世界陸上競技選手権大会 (2017/ロンドン) 代表選手選考競技会

- ▼日時：2017年5月21日(日)
競技開始時間 11時45分予定
- ▼会場：神奈川県・川崎市等々力陸上競技場
神奈川県川崎市中原区等々力1-1
- ▼アクセス：
東急東横・目黒線、またはJR「武蔵小杉」駅より徒歩20分
東急東横・目黒線、またはJR「武蔵小杉」駅よりバス(溝の口方面行)で「市営等々力グラウンド入口」下車徒歩5分
東急田園都市線「溝の口」駅またはJR「武蔵溝ノ口」駅よりバス(武蔵小杉方面行)で「市営等々力グラウンド入口」下車徒歩5分
JR南武線「武蔵中原」駅より徒歩15分

※駐車場は使えませんので、公共交通機関をご利用ください。

▼種目：

[IAAFワールド・チャレンジ]

〈男子10種目〉

100m、200m、800m、3000mSC、110mH、400mH、走高跳、棒高跳、三段跳、やり投

〈女子7種目〉

100m、200m、1500m、100H、走幅跳、砲丸投、やり投

[IAAFハンマー・スロー・チャレンジ]

〈女子1種目〉

ハンマー投

[オープン]

〈男子〉

400m、3000m、走幅跳

〈パラリンピック種目レース〉

男子100m T44/47、女子走幅跳T44

※種目は、予告なく変更になる場合がございます。

- ▼テレビ放送：TBS系地上波で放送 15時00分～16時54分(予定)
- ▼ラジオ放送：かわさきFM79.1MHz 14時00分～17時00分(予定)
- ▼公式HP：<http://goldengrandprix-japan.com>
- ▼チケット：好評発売中

一般入場券のご案内

前売り券ご購入の方のみ公式プログラム付(B席・グループシート以外)!!

開催日当日、会場のプログラム販売所でチケットと引換にお渡しします。

座席	前売り	当日
SS席/小学生以上	(指定席) 6,000	6,500
AA席/小学生以上	(指定席) 5,000	5,500
S席/小学生以上	(指定席) 4,000	4,500
A席/一般	(指定席) 3,000	3,500
A席/小・中・高校生	(指定席) 2,000	2,500
B席/一般	(自由席) 1,000	1,000
B席/小・中・高校生	(自由席) 500	500
ペアシート/S席	(指定席) 8,000	—
ペアシート/A席	(指定席) 6,000	—
グループシート/6人ボックス	(指定席) 9,000	—
グループシート/4人ボックス	(指定席) 6,000	—

※小学生未満無料。但し、指定席圏内にて座席を必要とする場合は指定席チケットを要購入。

※指定席からB席の移動可能。

※シルバー割引(当日券のみ)は、60歳以上の証明書提示にて一般料金より50%割引(B席対象)。

※障害者割引(当日券のみ)は、証明書提示にて一般料金より50%割引、付添人1名まで同一料金(B席対象)。

※各種割引詳細、車椅子席等のお問合せは大会問い合わせ窓口まで。
※購入後の払い戻し、券種変更は一切お受けいたしません。

前売り入場券販売所

■チケットぴあ

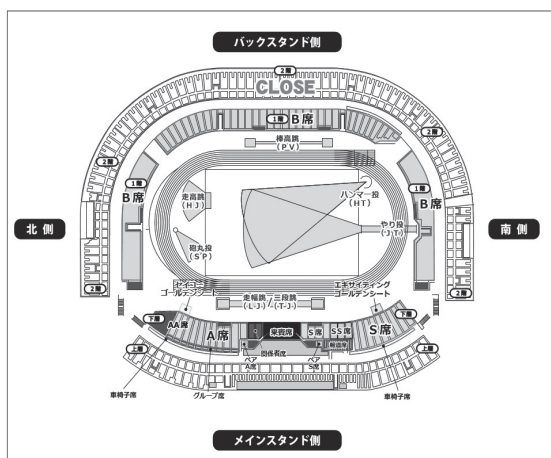
Pコード：HPをご確認ください。
インターネット購入 <http://t.pia.jp/t/> (24時間購入可能)
電話予約：0570-02-9999 (Pコード予約)

(店頭販売)

- ・全国のぴあ店舗
※営業時間は店舗によって異なる場合がございます。
※所在地・営業時間は<http://t.pia.jp/guide/retail.jsp>よりご確認ください。
- ・セブン-イレブン (24時間購入可能)
※店頭のマルチコピー機よりお買い求め下さい。
- ・サークルK・サンクス (7:00～23:00)
※店頭のカルワザステーションよりお買い求め下さい。

■チケットに関するお問い合わせ先

大会問い合わせ窓口(一般入場券のお問い合わせ等)
TEL 03-5974-1192
(平日 10:00～12:00、13:00～18:00)



※風向きなどにより、競技位置が変わることがあります。ご了承ください。

JAAF
OKAYAMA

一般財団法人岡山陸上競技協会

〒700-0012 岡山市北区いづみ町2-1-11 岡山県陸上競技場内
TEL.086-214-3156 FAX.086-214-3156
http://www.tiki.ne.jp/oka-rikkyou/

昨年度の岡山は、全国大会をはじめとした大きな大会が目白押しでした。

まず、1977年以来的インターハイ陸上競技開催。インターハイに相前後する形で中国高校と中国五県の2大会が行われました。更に、第2回を迎えた晴の国おかやまマラソン…と、審判員や補助員の確保だけでなく様々な地域から来岡する選手の皆さんに満足していただける大会運営…と気を休める間もない一年でした。

その忙しさを忘れさせてくれたのが、地元選手の大活躍でした。インターハイでは女子100m、200m、4×100mRで優勝した齋藤愛美（倉敷中央高）を筆頭に5種目で岡山県勢が優勝。さらにその勢いは続き、全国高校駅伝男子で倉敷高校が県勢初優勝、全国都道府県対抗女子駅伝でも準優勝することができました。さらに、大阪国際女子マラソンで重友梨佐が優勝、世界陸上女子マラソンの代表を射止めました。

まさに全国大会開催が刺激となって、競技力が向上するという好循環が生まれた年と言えるのではないのでしょうか。

岡山県では来年、全国中学校大会陸上競技が開催されます。運営面では、インターハイで培った運営ノウハウを全中のリハーサル大会で再確認しながら本番に向けた準備を岡山県中体連と連携して進めねばなりません。

選手強化でも、できるだけ多くの地元選手が活躍することで、岡山県での開催を盛り上げたいと思っています。

そのような中で、昨年度選手の活躍の勢いを今年度も継続する事で、最終的に東京オリンピックの代表を岡山県から出すことができれば…と、夢見ています。

JAAF
HIROSHIMA

一般財団法人広島陸上競技協会

〒730-0011 広島市中区基町4-1 県立総合体育館
(公財) 広島県体育協会内
TEL.082-223-3256 FAX.082-222-6991
http://hiroshimaf.org/

第51回織田幹雄記念国際陸上競技大会を迎えるにあたり、今年も、織田幹雄さんの出身地「海田町」を訪れた。前海田町ふるさと館館長（現広島大学教育学研究科研究生）青木義和さんの協力を得て、織田さんが選手時代から、記述してこられたノートを見せてもらった。それは、手帳も含め、数十冊。「勝負師となれ」とある「わが一代記」には、小学校時代からの記録がしたためられていた。初めて代表選手となった頃、朝日新聞社勤務時代、早稲田大学で指導者として教鞭をとられていた頃の指導案まで、様々な自分のことが複数のノートへ記されていた。しかし、それだけではない。各種大会の結果、日本記録、世界記録も整理されていた。もちろん、全種目についてである。現役選手でいながらにして、なぜ、こんなに多くの文書、記録を整理したのであろうか。それは、自分の立ち位置を知りたいからだ。

ノートを拝見する中で、織田さんは、多才で繊細で謙虚、そして努力家であると感じた。研究者の如く、鋭く分析されている。これこそ、織田幹雄さんが後世に残したメッセージ「勝負師となれ」の奥深い背景であると感動した。今回の織田幹雄記念国際陸上競技大会のポスターは、そんな織田さんが残されたノートをテーマとした。多くの方に、織田さんの勝負師としての奥深さを感じていただければ幸いです。

(文責：企画広報委員長 藤原文代)

JAAF
YAMAGUCHI

一般財団法人山口陸上競技協会

〒753-0815 山口市維新公園4-4 維新百年記念公園陸上競技場内
TEL.083-920-6125 FAX.083-920-6125
http://yaaf.jp/

山口陸上競技協会は、国体が開催された2011年より一般財団法人化を行い、今年で7年目に入ります。2017年は第4期の1年目となり、組織の改編や専門委員会等の見直しを行い、本県の陸上競技の発展のために尽力して参ります。

現在は2018年に開催が決定した日本選手権の準備委員会・実行委員会発足に向けて準備中です。また、今年で14回を迎える田島直人記念陸上競技大会が日本陸連のグランプリと位置付けられ、6月4日(日)開催となりました。8月の世界選手権(ロンドン)に向けても大切な大会となるため、協会一丸となって取り組んでいく所存です。

また、最近では山口県出身選手の活躍が目立っています。全国規模のマラソン・駅伝大会等で中本健太郎選手(安川電機)、田村和希選手(青山学院大)らの力走は我々を勇気づけてくれました。宮本大輔選手(洛南高校 周陽中出身)の活躍からも目が離せません。

3月第1週からは早々と強化記録会も行われ、2017年のトラックシーズンに向けても徐々に盛り上がりを見せています。

(文責：普及育成委員長 藤田昌彦)

JAAF
TOKUSHIMA

一般財団法人徳島陸上競技協会

〒772-0011 鳴門市撫養町大鼻島字湊岩浜6-23
TEL.088-678-7914 FAX.088-678-7921
http://www.jaafokushima.com/

4月8日、9日の徳島陸上カーニバルを皮切りに、県内のトラックシーズンが幕を開けました。昨年は伊藤舞選手(大塚製薬)、金丸祐三選手(大塚製薬)がリオオリンピックに出場し、本協会として明るいニュースとなりました。伊藤選手、金丸選手の他、今年の注目選手の展望をしてみます。

まず社会人では、110mHの大室秀樹選手(大塚製薬)の日本記録更新と世界選手権出場が期待されます。投てきでは円盤投の中田恵莉子選手(四国大職員)が日本選手権優勝を目指しています。

大学生では昨年砲丸投でU20日本記録を樹立し、円盤投ではU20世界陸上競技選手権で8位に入賞した幸長慎一選手(四国大)に期待がかかります。また同じ生光学園高校出身の武田歴次選手(日本大)が日本学生陸上競技対校選手権での連覇がかかります。またアジアジュニア選手権5000m 2位の緒方美咲選手(松山大)、砲丸投の西川チカコ選手(福岡大)も全日本インカレ等での活躍を期待しています。

高校生は、お家芸である投てき種目に注目選手が集まります。岡山インターハイ女子円盤投3位の高木智帆選手(鳴門渦潮高)、砲丸投の三田穂貴選手(生光学園高)、馬場さくら選手(生光学園高)、藤田駿介選手(生光学園高)らが中心になりそうです。また女子の跳躍では道中杏花選手(徳島市立高)がインターハイ新種目の三段跳で活躍しそうです。

中学生では100mの杉田侑弥選手(藍住東)、走幅跳の藤倉麻史選手(阿南第一)が今シーズン楽しみである。

(文責：強化委員長 藤川晋吾)

事務局からのお知らせ

◆◆JAAF公認ジュニアコーチ養成講習会◆◆

2017年度JAAF公認ジュニアコーチ養成講習会（日本体育協会公認陸上競技指導員養成講習会）
2017年度は全国16会場で開催決定！

ブロック	会場
北海道	北海道
東北	岩手・宮城・山形・福島
関東	埼玉・東京・山梨
北陸	新潟・福井
東海	三重
近畿	大阪
中国	広島・山口
四国	徳島
九州	宮崎

日程・申込方法等の詳細につきましては、4月下旬に日本陸連HPに掲載予定です。

◆◆安藤財団グローバルチャレンジプロジェクト支援対象者募集中◆◆

安藤スポーツ・食文化振興財団と日本陸上競技連盟は、将来、国際大会でメダル獲得を志す陸上競技の若手アスリートの海外挑戦、武者修行を支援するプロジェクト「安藤財団グローバルチャレンジプロジェクト」（愛称:グロチャレ）を実施しております。

詳細は安藤財団グローバルチャレンジプロジェクトHPをご覧ください。

<http://www.ando-zaidan.jp/ando-global-challenge/index.html>

◆◆2017年トラック&フィールドシーズンが始まります！◆◆

いよいよ今夏開催の第16回世界陸上競技選手権大会（2017 / ロンドン）の代表の座をかけた2017年トラック&フィールドシーズンが始まります！

4月からの競技会の情報は、公式WEBサイト

<http://www.jaaf.or.jp/fan/taikai/2017.html> に掲載しています。

是非、競技場でご声援をお願い致します！



陸連時報編集委員

◇編集委員

横川 浩（陸連会長）
友永 義治（陸連副会長）
八木 雅夫（陸連副会長）
尾縣 貢（陸連専務理事）
伊東 浩司（陸連強化委員長）
風間 明（陸連事務局長）
牧野 豊（陸上競技マガジン編集長）

◇時報編集室責任者

大嶋 康弘
◇時報編集担当
繁田 進
石塚 浩
青木 和浩
宮田 宏
廣瀬 静香

陸連時報編集室

〒163-0717

東京都新宿区西新宿2-7-1

小田急第一生命ビル17階

公益財団法人日本陸上競技連盟 内

TEL 03-5321-6580

FAX 03-5321-6591

WEBサイト <http://www.jaaf.or.jp/>

公式動画サイト <http://japanathletics.tv/>